

1 「生産者と消費者の思いを伝える農林水産業」の推進

(1) 地元農産物を使った新メニューの開発支援

◎取組の概要

設楽町の「道の駅アグリステーションなぐら」では、食堂コーナー「お母さんの店」にて地元の農産物を使ったお昼ご飯を提供しています。

農業改良普及課では、道の駅の発展のために様々な提案や支援を行っています。

平成 28 年 7 月から 8 月にかけて行われた消費者アンケートで、『地元の農産物を使った一品メニューが欲しい』という声が寄せられました。これを受けて、農業改良普及課では地元農産物を使った新メニューの開発支援を行いました。



消費者で賑わう「お母さんの店」
(H28.10.7 設楽町西納庫)

◎取組の成果

「道の駅アグリステーションなぐら」では、名倉地域特産のトウモロコシを1年中味わえるよう冷凍ピューレを試験開発しました。

農業改良普及課は、このピューレを活用して、「名倉のトウモロコシをいつでも味わえる」をコンセプトとしたコーンスープ開発を提案し、食堂スタッフと共に試行錯誤を重ね、平成 28 年 10 月に新メニューとして完成、商品化を実現しました。

コーンスープは販売開始後、定食メニューにももう一品や小さな子ども向けの一品として、消費者に大変好評を得ています。



消費者から好評の名倉産トウモロコシ
(H28.7.30 設楽町西納庫)

◎今後の展開方向

今回の新メニューの開発では、作った農産物を消費者により多く届けたい生産者と地元ならではの商品を求める消費者、双方の思いに応える取組ができました。

農業改良普及課では、今後も地元の農産物により活用するための提案を続け「道の駅アグリステーションなぐら」が生産者と消費者の思いが繋がる場となるよう支援していきます。



完成した新メニュー「コーンスープ」

(2) 和牛子牛産地を支える若手部会員の取組

◎取組の概要

新城市には、愛知県で唯一の和牛子牛専門の家畜市場があり、年間6回開催されています。総出荷頭数（平成28年）は1,362頭、うちJA愛知東和牛部会（52戸、繁殖用雌牛約750頭）からの出荷頭数は550頭で、全体の40.4%を占めています。

産地を維持・発展するには、高齢・小規模な和牛繁殖経営農家の経営継続を支援する必要があります。そこで、40歳以下の若手の和牛部会員8戸が中心となり、地域内の稲WCSの収穫梱包運搬作業を協力して実施することで、安価な粗飼料の確保を支援しました。更に、稲WCSの生育により取引基準を設定し、収量と品質の向上を図りました。

また、市場出荷頭数の増加のため、分娩間隔の短縮と経営規模の拡大を推進し、更に新規参入した繁殖経営農家に対し、定期的な飼養管理及び経営管理指導を行いました。



新城和牛子牛市場の風景
(H28. 9. 7 新城市)

◎取組の成果

収穫梱包運搬がされることで、高齢・小規模な和牛繁殖農家の必要とする粗飼料の約5割を稲WCSで確保することができ、飼料費の抑制により経営継続が可能となりました。

一方、和牛繁殖経営継承を推進する補助事業や繁殖用雌牛を増頭する補助金制度を活用して、若手の和牛繁殖農家3戸の経営規模を拡大することができました。

また、新規参入農家の繁殖及び子牛育成技術も徐々に改善され、市場平均価格に近い子牛を出荷するようになりました。



梱包された稲WCSのロール
(H28. 8. 30 新城市)

◎今後の展開方向

平成28年から本格的に和牛繁殖経営を開始した新規参入の若手農家に対し、子牛生産技術の向上と、地域・関係機関等で協力して和牛繁殖経営の新規参入モデルとして育成します。

そして、補助事業や制度資金を活用した和牛繁殖経営への新規参入を推進して、和牛子牛産地の維持発展を図ります。

稲WCSでは、作業能率を考慮した農地の集積、品質及び単位面積当たり収穫量の向上を目指します。



新規参入した若手農家の新築牛舎
(H28. 2. 4 新城市)

(3) しんしろ紅茶手づくり体験交流会

◎取組の概要

平成 28 年 7 月 31 日（日）に新城市作手農村環境改善センターで、しんしろ紅茶手づくり体験交流会が開催されました。この交流会は、しんしろ紅茶研究会の生産農家 6 戸が講師となり、紅茶作り等を通じて「しんしろ茶」のPRを図るイベントです。平成 26 年から毎年 7 月に開催され、今回で3回目の開催となりました。

紅茶作り体験は、参加者が講師の説明を受けながら、園地での茶摘み及び、茶葉の手揉み体験を行いました。また、お茶についての知識・関心を深めてもらうため、講師が持ち寄ったお茶で、お茶の種類当てゲーム等を行いました。



集まった参加者たち
(H28. 7.31 新城市)

◎取組の成果

当日は、新城市の親子連れを中心に、74 名の参加者が集まりました。講師がお茶ができるまでの過程、茶種の特徴、淹れ方、楽しみ方などさまざまなことを参加者に説明すると、参加者は興味津々の様子でした。お茶の販売だけではなかなか伝わらない「生産者としての思い」を消費者に直接伝えることができた貴重な時間となりました。



茶摘み体験
(H28. 7.31 新城市)



手揉み体験
(H28. 7.31 新城市)

◎今後の展開方向

今後も「しんしろ茶」のPRや消費拡大につなげるため、新城市、愛知東農業協同組合、茶の生産者と協力し、体験イベントを開催していきます。

(1) 主伐・再造林後の保育管理の重要性 ～「成林するのか？」所有者の不安に答える取組～

◎取組の概要

新城設楽管内では、循環型林業（主伐・再造林施業）を推進していますが、地域に定着させるためには低コスト化により採算性を高めることのほかに、再造林した苗木を確実に活着させて成林へと導くこと、さらにこれらを通じて主伐・再造林に対する森林所有者の理解を深めることが重要です。このため、これまで主伐・再造林を実施した事業地を「見本となる施業地」と位置づけ、森林組合に定期的な巡視を呼びかけ、林業普及指導員も植栽直後から巡回し、苗木の生育に必要な作業を提案・実施指導しました。

◎取組の成果

【地 拵 え】伐採から植栽までの一貫作業を推進する上で、地拵えは余分な作業と捉えられがちですが、表土を保護する役割や、残された枝葉により土壌へ養分が供給される働き、保育作業時の歩行の安全確保の面からも、適度な地拵えは必要と考えられます。

【獣害対策】獣害防止柵は、一箇所でも倒木等で破られてしまうと害獣の侵入を受け、全滅する危険性が考えられることから、定期的な見回りと、早期の対処が重要です。

単木保護を設置した現場でも、苗の穂先が網目から出て生長する等が見られたことから、獣害防止柵と同様に、定期的な見回りと早期の対処が重要であることが判明しました。

【植栽】凍上による根鉢の浮き上がり等が確認され、これは凍上や風で苗木が揺すられたことが原因と推測されることから、植栽が容易とされているコンテナ苗であっても、丁寧に植付けることの重要性を再認識しました。また、コナラ植栽地では、苗と下草の判別が予想以上に困難で、誤伐や踏んでしまう危険があったほか、苗木を探す手間もかかりました。今後、広葉樹を植栽する場合は、あらかじめ苗木に目印テープを付ける等の工夫をして、下草に覆われる前に周囲を刈ることの必要性が判明しました。

【森林所有者及び森林組合への意識付け】植栽後の最初の夏に、下草による苗木の被圧が確認された場所において「苗木の点検・下刈(坪刈)研修」を実施しました。下刈は誤伐防止や苗木1本1本を確認するため、手鎌を用いた坪刈りとししました。実施箇所の苗木の生長は顕著で参加者も坪刈りの効果を実感しました。この研修を所有者等と一緒に行ったことで、定期的・継続的な管理の重要性について共通認識を持つことができました。



苗木の点検・下刈(坪刈)研修



下刈前の様子



下刈後の様子

◎今後の展開

現場で気付いたことは適宜森林組合に情報提供し、今後、主伐・再造林施業に取り組む他の事業体に対しても作業の留意点や、植栽直後からの苗木の定期的な点検及び適期に保育作業を行うことの重要性を呼びかけていきます。